「おしゃべり場」

「軽井沢のホントの自然」について、みんなでおしゃべりする「おしゃべり場」を開催しました。

時　間　　11月23日（木・祝）　10時30分から12時まで

場　所　　軽井沢町中央公民館　講義室

参加費　　無料

参加条件　　次のいずれかに該当する者が参加可能
・「軽井沢のホントの自然」セミナー（令和5年11月3日開催）に参加した者
・「軽井沢のホントの自然」セミナーの配信動画をあらかじめ視聴した者

申　込　　不要

参加者　　一般参加者　15名
軽井沢22世紀風土フォーラム基本会議委員　7名

内　容
1　開　会
2　説　明
3　グループワーク
4　発　表
5　講　評
6　閉　会

テーマ　　今の軽井沢の自然環境に必要なこと

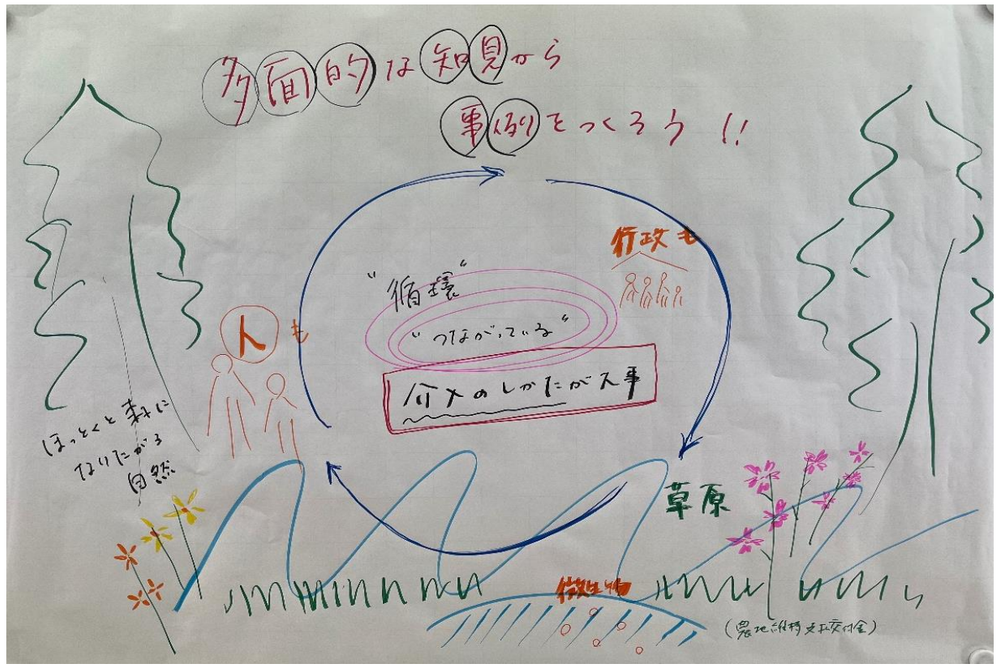
ルール　　各グループで結論をまとめるのではなく、それぞれの意見を自由に述べてもらう

「おしゃべり場」

「おしゃべり場」の様子

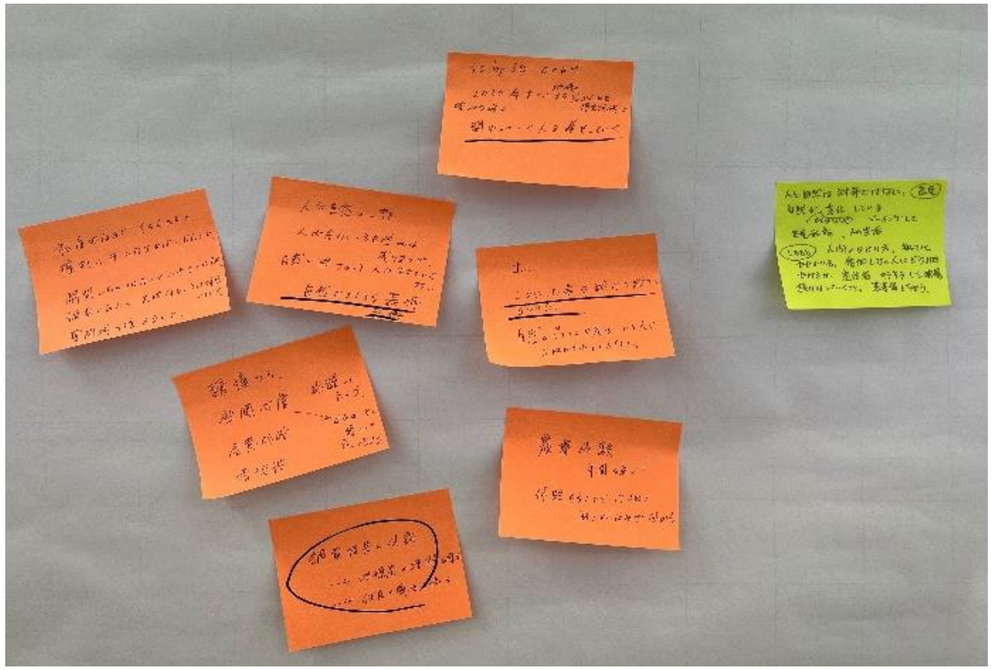
「おしゃべり場」

① グループ



No.	主な意見及びアイデア
1	「自然」には、人の介入が必要。ただし、全ては繋がっているため、人の介入によって「自然の循環」を阻むことにならないように注意が必要。
2	さまざまな知見を持ち寄って事例を作れば、それが今後の指針になる

② グループ



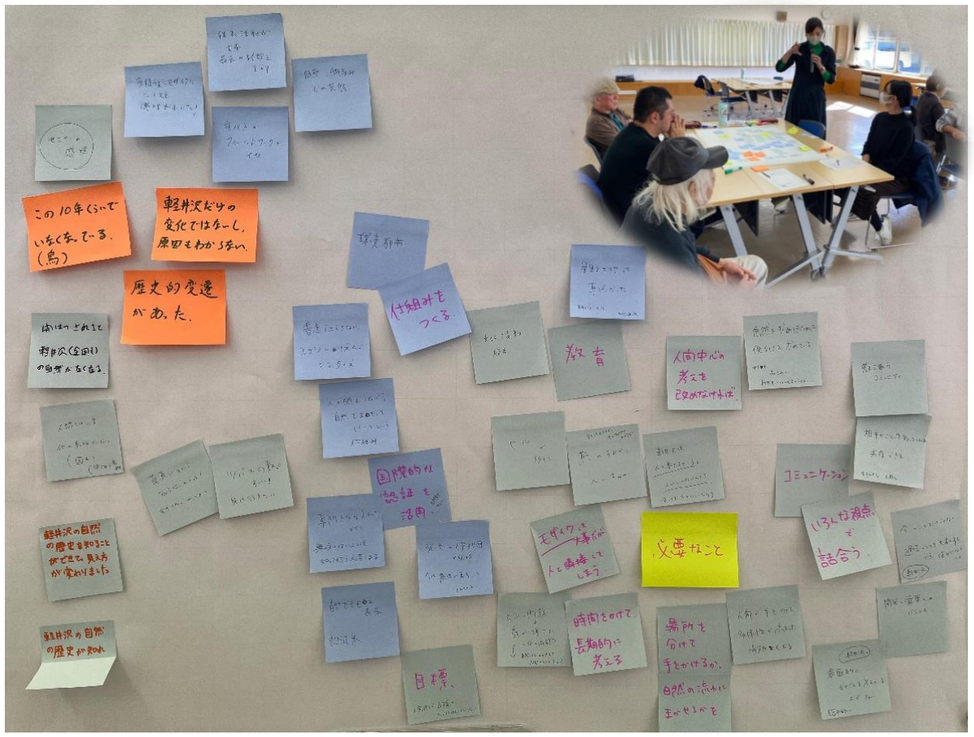
No.	主な意見及びアイデア
1	おしゃべり場のような機会を増やし、関わっていく人を増やしていくことが重要
2	「自然」に関する情報は、広く公開してほしい

「おしゃべり場」

③ グループ

No.	主な意見及びアイデア
1	家を建てるときに、もともとそこに存在しない樹木を植えるのではなく、もともとある樹木を残すということが大事
2	表土を残すことが重要。工事をするときに、表土を１回取って、それをもとに戻したら、元々生えていた樹木が、そこから生えてくるのでは。
3	軽井沢にもともとあった、湿地や草原の素晴らしさを住民に分かってもらえるようにすることが大事
4	軽井沢にもともとあった湿原や草原が森・林に変化したのは、自然の摂理だと思う一方、湿原や草原を必要とする生き物たちを残すために、人間が手を入れてそれらを残していかなければならないとも思う
5	湿原や草原の保護には、農業従事者の理解が必要

④ グループ



No.	主な意見及びアイデア
1	人が集まる場所と人がいない場所を分けた方が良い
2	人間中心の考えを改めることも大事。自然を求めて軽井沢に来たはずなのに、便利さを求めてしまう。自然に関する教育活動も必要ではないか。
3	さまざまな視点で、おしゃべり場のように話し合うことが必要
4	人間の手で壊れてしまった自然に対しては、人間が介入し対処する必要があるが、自然の摂理で起こる環境の変化に対しては、流れに任せることも必要ではないか
5	人間が介入するのか、自然の流れに任せるのか、目標を作るべき
6	興味のない人たちに対しても、土地（自然）の価値を知ってもらうことが必要
7	さまざまな人が関わって、さまざまな視点で話し合いながら、目標を立てる仕組みを軽井沢に作ったらどうか

講　評

【「軽井沢のホントの自然」セミナー　講師　石塚　徹氏】

皆様から貴重なご意見が出され、大変有意義な場になったと思います。

皆様のご意見を踏まえ、私なりの考えを申し上げたいと思います。

まず、地域の固有性に基づいて「保全」を行うことが重要です。

別荘地は、昔、草原だったところが多いので、木を切って日を当ててあげれば、眠っていた草花の芽が出てくる可能性があります。種は 50 年～100 年程度生きていますので、木を切って少し日を当ててあげれば、意外なものが出てくる可能性があると思います。

チョウを例に挙げますと、軽井沢にはたくさんのチョウがいますが、100 種類余りの半分程度は絶滅危惧種です。チョウのことを考えて、チョウの食草になるような木を植えるのも生物多様性の保全につながる活動になると思います。別荘の隣同士でそうした活動を共有し、輪を広げれば、より効果的ですね。

自然な遷移については、無理に戻そうとしなくても良いと言われることがありますが、それは数千年というスパンでの話なので、我々一人ひとりの寿命の中で、目に見えて変化が起こっているとしたら、それはやはり人間の経済活動の影響によるものだと思います。例えば、人間が冷房やアスファルト等を享受したことにより、温暖化が進み、温暖化すれば乾燥化が進み、乾燥化すれば湿地は草原になり、草原は林になっていくわけですが、その速度が恐れるべきものであるという現状の中で、今の軽井沢ならそれが何らかの方法で食い止められるかもしれないと考えています。

人が手をかけてきた里山エリアは、手をかけ続けないと、動物と人との共存は難しいと思います。それは、クマでもシカでも、イノシシでもそうです。居住区の近くにクマが潜む藪を作るわけにはいきませんから、安全な居住区とは別に、生物多様性保全地域を設け、狭い中でもモザイク状にいろいろな環境が含まれるようゾーニングされたら良いと考えています。

農業関係者の方から、生物多様性に興味はない、そのために農業をやっているのではないと言われるかもしれないですが、国際的な約束事「30by30」の OECM（自然共生エリア）は、本来の目的に関わらず、結果的に生物多様性に貢献しているエリアであれば認定されます。今まで通り農業を続けていただくだけで、それが国際的に評価されるのです。何も変える必要がないことをきちんとお伝えして、ぜひ自然共生エリア、すなわち保全エリアに登録していただきたいと思います。

最後になりますが、多様な環境がモザイク的に存在した方が良いという、皆さん共有の理解があって、非常に嬉しく感じました。